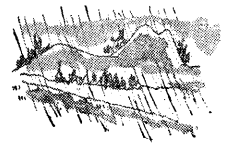


## 子どもと時間

わたくし自身大学の教師としていくつかの講義を担当しているのですが、まだなりたてのころは毎週きまった時間に用意した内容を前回からの続きとして学生たちに話し、最後に「何か質問はないですか」と尋ねて、別に質問が出なければそれでその時間はおしまいということが全学期にわたって続けられていました。しかし、このような繰り返しを何回かしてみるうちに、だんだんとわたくしが話したことを学生たちはどのように受取っているのでしょうか、質問がないということは全然講義の内容について疑問がないということなのであろうか、講義から学生たちが学びえたことは学期の最後に試験を試みればわかることと言いつつ切ってしまうのであろうか、などの問題を感じるよ

古沢 頼雄



うになっていきました。

どうも教師が講義をし、学生たちはそれを聞いていっているというありきたりの方法では、伝え手としての教師と受取り手としての学生相互間のこまかい吟味がなされないままに、ただ慢然と授業が進んでいくことになってしまっているのではないであらうか。そんなことが教育における教師のあり方という問題につながって自分自身の中に問題として出はじめてきたのは、講義というのをはじめてから三、四年経ったころからでした。

そこで、ある年から授業の形式を大幅に変えてみることにしました。そこでは、まず最低限必要なことはいわゆる講義として話をするのですが、あとは参考書を指定して、教

室では学生の方から出される質問に回答するという形で授業を行なうということ、つまり、教師の独演会として講義が成り立つのではなくて、主役は学生自身であり、その考えを進める上で援助するのが教師である、という立場に立って授業をすすめてみたわけです。試みてみるとそんなに円滑にことが運ぶわけではありませんでした。はじめの一、二回はまったく学生から質問も出ず、ただ黙っているだけで時間がおわってしまいました。「黙っているだけで講義をしてくれない授業なんて出席していても無駄だ」と出てこなくなった学生も何人もいました。しかし、人数が減っていてもそれでも出席している学生たちからだんだんと質問が出るようになり、わたし自身も普通の講義をしていたら落としていたかもしれない事柄を、あらためて次の回までに調べてみるというようにすることにいくわすことも何回かおこりました。何よりも自分で学んでいこうという姿勢が教室にあふれるようになったことから、いままでない新鮮さを学生自身感じることができたようでした。

さて、このようなことは、いわゆる遊びの過程の中で子どもとふれるときの大人自身のあり方と子どものあり方との関係と共通のものを含んでいるように思われます。新し

い場面に入って来た子どもが、はて何をしようかと迷っている。その時、大人がいろいろとお膳だてをして、子どもにサービスをして、「こうしたら、ああしたら」と誘導していくと、子どもはすぐにその場の中で遊び出すには遊び出すのですが、しかし、長い目でみるとその場の中でなされる遊びの内容は、いつしか大人が誘導したそのわくの中のものを越えないものとなっていくのに気づきます。ところが、はたと困っている子どもの気持ちを理解していくことに目をむけて、子どもが遊びだそうという気持ちの動きをじっくりと待っていてあげるならば、実際に子どもが遊び出すまでの時間はかかったとしても、遊び出すようになってからの子どもの動きはとも生き生きとしたものとなっていくといえましょう。ここで、とりあげる必要のあることは、動作として動き出さない相手をみて、何とかしないといけないというこちらのあせる気持ちから、強引に相手を引きまわしてしまうことになりがちであるということではないでしょうか。

さて、このような事柄を通して見た場合に、広い意味での教育―それは前の世代の行なう次の世代の発達への寄与と考えることができる―の中で、どうしても大切にしてい

かなければならないと考えることは、「時間をかける」ということであるといえましょう。もちろん、それは無駄に時間を過ごすということではなくて、あくまでも相互の人間関係を底流にして大人が子どもを見守るということと言いかえることができるでしょう。教育ということとは、土台、時間をかけるもの、時間のかかることであると考えるとしかるべきことなのでしょう。しかし、近ごろは、生活すべてに時間をはぶくことが重視されてきていることからして、また、時間のかかることには黙ってみていられないという大人自身の知らず知らずの心の動きからして、このような時間をかけるという傾向はとかく避けられてしまうことが少なからずあるのではないのでしょうか。

ベッテルハイムという人は「愛はすべてではない」という書物の中で、子どもが目をさましてからベッドを離れるまでの過程について次のようなことを言っています。目をさましたばかりの子どもは、ねている間に見た夢の内容や寝具の中の心地よさをあらためて感じなおしながら、だんだんとおきてから出会うであろういろいろな現実への準備をしているのである。であるから、子どもが目をさましてもなんとなくベッドのなかで時間を過ごしているのは、実

は起きてから行動しなければならぬ自分自身というものをたてなおしている過程なのだともみることができるというわけです。

このように、めざめということを考えてみると、大人は多くの場合、そこでの時間のもつ意味をまったく無視して、たとえば、「さあ、目をさましているならば早くおきなさい。」「早くおきなさいとおくれますよ。」「などと子どもの気持ちのゆとりを目を向けずに、行動の切り換えを要求していきま

す。子どもの時間を大人がはぶいてしまふ、切りとってしまうということとは、われわれ大人の子どもへのふれ方の中で意外に多いのではないのでしょうか。たとえば、子どものしていることに口を出したり、手をだしたりしてしまふこともこの部類に入るでしょう。子どもなりに一生懸命であっても大人からみてそれがまだるっこしかったり、ぎこちなく思われたりすると大人はつい手助けの積りでしてあげてしまうことが、結果的には子どもがそれを子ども自身で続けるならば経験するであろう時間を、内容ごと強引に切り取ってしまうことになるのです。そして、この傾向は、あらかじめ考えた大人の側の予定やわくがが強固であれ

ばあるほど強くなり、子どもの側の立場を軽視して、大人は自分のわくに相手を知らず知らず当てはめていかないといられなくなってしまふのです。

このような大人のかかわり方の下での子どもの経験は、ちょうどテレビを通して見知らぬ土地のことを知り、そこへ行ったような気持ちになってしまうことと似たようなものでしょう。実際にそこまで足を運んで、時間をかけて自分の眼で見てくるとでは、経験する内容がまるっきり違うことはだれにも明らかなことでしょう。

子どもが子どもなりのペースで時間を確保できることは、自分から物事に興味をおぼえ、判断したり、理解したり、楽しんでいくための前提となることでしょう。それは、大人がお膳立てして効率よく整理して、彼らに物事と出会わせるのではまったく違った経験を子どもにもたらずであります。

失敗とかどうしてもうまくいかないこと、思わない障害に出会ってみてはじめてどうしたらそれを乗り越えることができるかについての工夫が生れてくるのであります。すべてが正解につながるような、あるいは、正解のみをよしとして、そのみに子どもの目を向けさせるような

大人の子どもの対する働きかけは、それが子どもに目に見える変化を時間をかけずにひきおこしたとしても、子ども自身の内奥からの発達をよびさましたものとはいえないのではないのでしょうか。

大人の生活からは時間がはぶかれている現代の社会において、子どもの生活では彼ら自身が十分な時間をかけて彼らの時代を過ごせるように教育の問題の中でももっと考えていく必要を感じて、わずかばかり表現してみました。

(日本女子大学)